

詫びの手紙文における情報の展開構造

——中級日本語学習者と日本語母語話者の対照分析——

西村史子*・鹿嶋 恵**

キーワード: 情報, 展開構造, 導入標識, 結束性, 状況理解

要 旨

中級日本語学習者の書いた文章が持つ不自然さ, 日本語母語話者との違いを文章の展開構造に着目し分析した。用いたデータは, 学習者 58 名, 母語話者 51 名によって書かれた日本語の詫びの手紙文の本文部分である。予めデータ提供者には課題として, 東京在住の先生に長い間本を借りたままで近々上京の予定があるのでその折に返すという内容の手紙を書くように具体的に指示した。分析の結果次の 3 点が明らかとなった。① 学習者は設定課題で示された内容をその通りに日本語に置き換える傾向にあったが, 母語話者は状況を自分なりに解釈し, 情報の提示順序を入れ替えて文章を構成する場合が見られた。結果として母語話者には豊富なバリエーションが見られた。② 新しい情報を導入する際の表示標識(例えば「さて」など)の使用実態を見ると, 学習者は画一的であるが, 母語話者は様々で複合した型も見られた。③ 本未返却の理由を書くに際して, 両データにはその書き方に異なりが見られた。これらの原因としては学習者に, 1) 状況を解釈し適切に構成していこうとする姿勢の不足, 2) 情報の深刻さや内容の変わり目を察知し, 各状況にあった表示標識を用いるための構文及び文化的な知識の不足, 3) 日本語において詫びたり, 理由を述べたりするための社会言語学的な知識の不足, 4) 母語である英語からの影響, が示唆された。

1. はじめに

1-1. 研究の目的

日本語学習は, 一般に学習レベルがあがるにつれて, 単文から文章 / 談話へと理解や産出の学習目標が移行していく。ある程度まとまった分量の文章 / 談話では, その中に複数の情報が含まれ, 書き手 / 話し手は情報と情報との間につながりを持たせ筋が通るように工夫することが求められる。しかし特に書き言葉の場合, 学習者の文章は, 基礎的な構文力が向上しても往々にしてまとまりに欠け, 不自然な印象を与えることが少なくない。

* NISHIMURA Fumiko: ワイカト大学東アジア学科講師。

** KASHIMA Megumi: 三重大学留学生センター講師。

ところで、文学や国語学の領域では、様々な角度から手紙文が分析の対象となってきた(佐藤 1990, 中島 1990, 橋 1999 参照)。加えて最近では、手紙文における感謝表現の分析(杉戸 1994)や勧め表現の分析(柏崎 1997)、依頼のストラテジー分析(森山 1995)など、言語行動に焦点を当てた研究が目新しい。従来の多くが既存の歴史的文献や文学資料をデータとしてきたのに対し、塩澤(1989)や西村(1998)は、課題を設定して手紙文を書かせる手法により、同条件下の多量データを収集した点で異なっている。塩澤(1989)の課題は、書き手にとって切実な問題を解決するために目上の人に協力を依頼するという手紙であり、材料配列の分析の結果、五段階の文章構成が指摘された。西村(1998)では、設定課題として手紙の受取人や状況が細かく指示され、それに基づいて詫びの手紙文3種(中級日本語学習者、日本語母語話者、英語母語話者)が収集された。その誤用分析と対照分析の結果、学習者に見られる文の丁寧さや適切性の問題が明らかにされた。

以上のような先行研究を踏まえ、本研究では西村(1998)と同じく詫びの手紙文を元に新たにデータを加え、特に情報の展開構造に着目して、日本語学習者が書く日本語の不自然さが何に起因しているのか、また日本語母語話者の日本語と何が違うのかという観点から対照分析を試みる。具体的には以下の3点に焦点を当てる¹。

- ① 手紙文の中で、複数の情報がどのような順序で提示されているか。
- ② 情報間の結束性がいかに表示されているか。
- ③ 書き手が与えられた状況をどのように捉え、それがいかに手紙文に反映されているか。

1-2. データの設定課題とデータ提供者

本研究で用いたデータは日本語母語話者及び中級日本語学習者によって書かれた手紙文である。両者は次のような状況が与えられ²、手紙を書くように指示された((a)~(f)の記号は与えられた指示にはなく、拙文で便宜上付したものである)。

手紙の受取人: 田中花子, 先生, 東京に住んでいる

状況: あなたは田中先生から本を借り、長い間返していない... (a)

その理由は... (何か自分で理由を書いてください)... (b)

あなたは来月東京へ行くつもりで... (c)

田中先生に会って本を返したいと思っている... (d)

田中先生の都合が良ければ先生の研究室に行くことを考えている... (e)

東京に着いたら、電話するつもりでいる... (f)

この状況は、上に示したように (a)~(f) の6つの情報で構成されている。これらは設定課題

¹ 今回は手紙の本文のみを分析の対象とする。したがって、いわゆる手紙文の書き方などで取り上げられる頭語—結語などの形式や、挨拶や季節のことばなどは分析の対象とはしない。

² 学習者にはこの課題は英語で与えられた。

を遂行するために言及する必要がある情報であり、本稿では『コア情報』と呼ぶことにする。そして便宜上、(a)～(f) 各々を、(a)〈本の返却遅滞〉、(b)〈理由〉、(c)〈上京〉、(d)〈本の返却〉、(e)〈研究室訪問〉、(f)〈電話〉と呼ぶことにする。

データ数及び提供者は以下の通りである。

- 日本語学習者データ： 58 名分(以下「データ L」とする)
 ニューゼーランド、ワイカト大学東アジア学科において、上級日本語コースを履修した学生³
 1997 年から 1998 年にかけて採集
- 日本語母語話者データ： 51 名分(以下「データ J」とする)
 筆者らが所属している / いた日本国内の大学に在籍の大学生、大学院生及びその関係者
 1997 年から 1998 年にかけて採集

2. 情報の展開構造

まず、展開構造を見るにあたって、どの情報がどのような順序で提示されているか見てみたい。上でも述べた通り、与えられた課題を遂行するには 6 つのコア情報に言及する必要がある⁴。これらの情報は実際にどんな順序で提示され、そしてデータ L、J にはどんな異なる傾向が見られたのであろうか。表 1 と表 2 は、コア情報の提示順序を調べまとめたものである⁵。

この 2 つの表から以下の 3 点が言える。

- ① データ J の方がバリエーションが多い。
- ② どの情報が一番先に導入されるかという点に着目すると、3 つのパターン、即ち〈本の返却遅滞〉先導型、〈理由〉先導型、〈上京〉先導型のパターンがある。
- ③ 上記の 3 つのパターンのうち、最も多く採用されたのは両データともに〈本の返却遅滞〉先導型である。

両データで最も多く現れた〈本の返却遅滞〉先導型は、先の状況設定に示された通りの順序に沿ったものである。このことからこの最頻用パターンは、手紙を書くにあたって展開構造を特に考えずに済む、最も易しいパターンと言うことができるであろう。データ L の殆どがこのパターンを選んだのもそのためと推察できる。

³ このコースの学習者は高校から日本語を学び始め、大学でも引き続き勉強しているという者が殆どである。この上級コースは当大学の 3 年生のコースである。上級とはいえ、彼等の日本語能力は、所謂一般の中級レベル(日本語能力試験 3 級以上～2 級程度)に匹敵すると考えられるので、表題にはそのように記した。

⁴ 設定課題の指示にも拘わらず、コア情報のいくつかは提示されないデータもあった。データ J で 16 例、データ L で 10 例見られた。その不提示の理由は今回のデータからのみでは判断できない。これについては今後の課題としたい。

⁵ 表 1 及び表 2 では初めて提示されたコア情報のみを記し、繰り返して提示されたものは省略してある。

表1 データLのコア情報の展開構造パターン

〈本の返却遅滞〉先導型	小計	56 (97%)
本遅 → 理由 → 上京 → 返却 → 研究室 → 電話		43
本遅 → 理由 → 上京 → 研究室 → 電話		6
本遅 → 理由 → 上京 → 返却 → 電話		2
本遅 → 理由 → 上京 → 研究室		1
本遅 → 理由 → 上京 → 電話		1
本遅 → 理由 → 上京		1
本遅 → 上京 → 返却 → 研究室 → 電話		2
〈理由〉先導型	小計	2 (3%)
理由 → 本遅 → 上京 → 返却 → 研究室 → 電話		2
	合計	58 (100%)

コア情報の略号 本遅: 〈本の返却遅滞〉, 理由: 〈理由〉, 上京: 〈上京〉,
返却: 〈本の返却〉, 研究室: 〈研究室訪問〉, 電話: 〈電話〉.

表2 データJのコア情報の展開構造パターン

〈本の返却遅滞〉先導型	小計	39 (76%)
本遅 → 理由 → 上京 → 返却 → 研究室 → 電話		16
本遅 → 理由 → 上京 → 研究室 → 返却 → 電話		8
本遅 → 理由 → 上京 → 研究室 → 電話		2
本遅 → 理由 → 上京 → 電話		1
本遅 → 理由 → 返却 → 上京 → 研究室 → 電話		2
本遅 → 理由 → 研究室 → 返却 → 上京		1
本遅 → 上京 → 返却 → 理由 → 研究室 → 電話		1
本遅 → 上京 → 返却 → 研究室 → 電話		3
本遅 → 上京 → 返却		1
本遅 → 上京 → 研究室 → 返却 → 電話		1
本遅 → 返却 → 理由 → 上京 → 研究室 → 電話		1
本遅 → 返却 → 上京 → 研究室 → 電話		2
〈理由〉先導型	小計	5 (10%)
理由 → 本遅 → 上京 → 返却 → 研究室 → 電話		2
理由 → 本遅 → 上京 → 研究室 → 返却 → 電話		2
理由 → 本遅 → 上京 → 研究室 → 電話		1
〈上京〉先導型	小計	7 (14%)
上京 → 本遅 → 理由 → 返却 → 研究室 → 電話		1
上京 → 本遅 → 理由 → 研究室 → 返却 → 電話		1
上京 → 本遅 → 返却 → 研究室 → 電話		3
上京 → 理由 → 本遅 → 返却 → 研究室 → 電話		1
上京 → 研究室 → 本遅 → 返却 → 理由 → 電話		1
	合計	51 (100%)

コア情報の略号 本遅: 〈本の返却遅滞〉, 理由: 〈理由〉, 上京: 〈上京〉,
返却: 〈本の返却〉, 研究室: 〈研究室訪問〉, 電話: 〈電話〉.

他方、〈理由〉先導型、〈上京〉先導型は設定課題に示された状況を手紙の書き手が独自に構成したものと言える。ただ、データに現れた実態をよく見ると、〈理由〉先導型は、実際には〈本の返却遅滞〉と〈理由〉、即ち上記設定課題中の (a) と (b) のみを入れ替えた、言わば準〈本の返却遅滞〉先導型である。これに比べて〈上京〉先導型は設定課題内に示された順序から大きく異なっており、文章の構成力が要求されるパターンと言える。データ L でこのパターンが全く現れなかったのもその難しさ故と考えられる。

以上コア情報の提示順序から見た展開構造についてまとめると、学習者の多くは、課題として与えられた状況をそのまま訳したと思われる順序で手紙を書いていた。日本語母語話者にもその傾向は認められたものの、自分なりに状況を解釈して情報構造を構成し直し、展開していく場合も見られた。その最たる例が〈上京〉先導型であった。この自分なりに解釈し、文章の構造を構成していく過程の存在が、データ J のバリエーションの多さを生む一因ではないかと思われる。

3. 新情報の導入と導入標識

次に、コア情報がいかに導入されているかを見てみたい。

先に見た6つのコア情報は、各々独立した情報である。これらを構成して導入していく際には、書き手は前後との結束性をしっかりと把握しておく必要がある。即ち、個々に導入される情報が新たな情報であること、あるいは先に導入された情報や後続の情報とつながりがあること / ないことといった関係である。このような情報間の結束性に言及する場合に簡便なのは、接続詞を用いる方法であろう。「さて」「ところで」「実は」などは、その典型的な例である。また次の例のように、突然手紙を送ることを断る「前置き」も非常に明示的な手段である。これは手紙文特有の用法と言えよう。

- (1) 突然の手紙で驚かれたことと存じますが、先日、先生から長い間お借りしていた本をようやく読み終えたのでお返ししたいと思います。
- (2) 突然のこととなりますが、来月東京の実家に帰ることになりましたので、そのことをお伝えたく思い、今回の手紙を書いている次第です。

これらの接続詞や前置きは、前後の話(情報)の内容にどのような結束性があるのか / ないのかを示すマーカーとして共通の役割を果たしている。ここではこれらをまとめて『新情報の導入標識』(以下「導入標識」と呼ぶことにする。それではデータ L, J において、導入標識がどのように用いられ、またどのような使用傾向の異なりがあるのか見ていく。

3-1. 最初のコア情報の導入と導入標識

まず手紙文本文における最初のコア情報にどのような導入標識が用いられているかを調べた。

表3 最初のコア情報導入時に用いられた導入標識

導入標識	〈本の返却遅滞〉先導型						〈理由〉先導型			〈上京〉先導型			合計
	さて	ところで	前置き	実は	その他	なし	さて	実は	なし	さて	前置き	なし	
データ L	50	0	0	3	1	2	1	0	1	0	0	0	58
データ J	15(1)	7	5(3)	0	3(1)	9	1	1	3	4	1	2	51

()の数字はそこに含まれる「前置き+実は」のような複合の場合を示す。

表3はその結果である。ここから次の3点がわかる。

- ① 「さて」+〈本の返却遅滞〉導入のパターンが多い。
- ② 「ところで」という接続詞が、データ Lには全く見られなかった。
- ③ 「実は」と「前置き」の用法には、データ L, Jに異なりが見られた。

まず①について、このパターンは、データ L, Jともに最も多い。特に、データ Lに圧倒的に多く、86% (50例)にものぼる。これはデータ提供者が履修した日本語クラスの中で「さて」を使うように強く勧められたことが影響したものと考えられる。「これは義務ではない」と必ず言及されていたものの、学習者の中でかなり強い一般化がなされたようである。これに対してデータ Jでは、29% (15例)に過ぎない。

次に②について、「ところで」は学習者にとっては既習事項であり、教科書には「さて」と同様に挙げられていた。にも拘わらず使用例が見られなかった理由には、①にも触れたように「さて」の過剰一般化の影響が考えられる。

最後に③についてだが、データ Lの場合、例(3)(4)のように、「実は」は直接〈本の返却遅滞〉を導入するのに用いられていた。

(3) 実は、しばらく間お借りしたご本はまだおかえしてありません。

(4) 実は田中様からかりた本を長い間おかえしになりませんでした。

他方、データ Jでは「実は」は〈理由〉先導型の1例しか挙がっていない。しかしながら、次のように「前置き」に続いて「実は」が用いられる複合の形が見られた。

(5) 今回突然お手紙しましたのは、実は以前先生にお借りした本をまだ返していなかったことに気づいたためです。

(6) 今回は先生にお詫びしなければならないことがあり、お手紙をさしあげます。実は、以前にお貸しくださいました本のことですが、不注意にも先生にお返しするのを忘れておりました。

このような前置き表現は改まりの感があり、以下に続く事柄が重大なものであることを窺わせる。即ちこれらの日本語母語話者は、課題を読んだ時点で、〈本の返却遅滞〉を突然手紙で伝えることを深刻に受け止めたと考えられる。他方、データ Lには、このような前置きの使用は見ら

れなかった。その理由の1つとして前置き表現の形式を知らなかったことが考えられる。加えて学習者は、このことをさほど深刻に捉えなかったことも考えられよう⁶。このことから、構文に関わる知識のみならず、その背後にある社会的な背景知識(ここでは前置きを用いるべき深刻な状況とはどのような場合かという知識)の重要性が示唆される。

3-2. 〈本の返却遅滞〉に続くコア情報と導入標識

次にデータ L, J で最も多く見られた〈本の返却遅滞〉先導型に焦点を絞って、次の展開の大きな変わり目となる〈上京〉の導入に着目してみよう。

と言うのも〈本の返却遅滞〉とその〈理由〉が述べられた後、残りの4つのコア情報の中では〈上京〉が最初に言及される傾向が強いためである。〈本の返却遅滞〉と〈理由〉が現在に至るまでの状況を示しているのに対し〈上京〉を含む残りの4つのコア情報が今後の状況である点で性格が異なっている。つまり、ここで導入標識が使われる可能性が高いと推測される訳である。

それではまず〈上京〉というコア情報が導入される際の導入標識の有無を見よう。設定課題では「あなたは来月東京へ行くつもりで」となっている。これをそのまま「来月東京へ行くことになりました」と書いても問題はない。しかしデータ J の場合、その前に約6割(33例)が「つきましては」「ちょうど」「今度」「そこで」などの導入標識を用いて前の情報との結束性を示している。これに対して、データ L ではこのような例はわずか5例と少なく、9割(50例)は何の標識も用いていない。

次に〈上京〉を導入する場合に段落を改めているか否かを見る。日本語では話の内容が大きく変わる場合は段落を改めることになっている。逆に言えば、段落を改めている場合は情報内容が大きく転換した、即ち結束性が弱くなったという書き手の認識が窺える。分析の結果、データ L で39%(22例)、データ J で71%(38例)の改段落が認められた⁷。データ J に比べデータ L のその割合はかなり低く、内容転換の認識が弱かったか、若しくはその認識を表示できなかったものと考えられる。

最後に、〈上京〉の提示後に〈本の返却〉若しくは〈研究室訪問〉が導入される場合の導入標識の有無を見る。データ J は約5割(21例)が「その際に」「その時に」「その折りに」などの導入標識を用いている。他方、データ L は3割(14例)で、そのうち5例は「あの時」などの誤用であった。

以上の分析からデータ J では展開構造の節目となる箇所で導入標識が積極的に用いられており、

⁶ この度は学生が先生に対し手紙を書くということで丁寧な手紙が期待されている。しかし、ニュージーランドでは何事もカジュアルな傾向があるため、先生への丁寧な振舞いという点では日本と異なる可能性もある。

⁷ ただし、この中には、ちょうど前文の最後が行末に来た結果、改行されているものも含まれており、改行が意図的な改段落か否かは断言できない。

かつそのバリエーションも豊かであることが分かる。これに対しデータ L では導入標識の使用箇所が限られており、かつそのバリエーションも少ない。結果としてデータ J では情報構造内の結束性の有無が明瞭であるのに対し、データ L ではそれが不明瞭であり、その結果、手紙文としてはまとまりの弱い印象を与えてしまうと考えられる。

3-3. 導入標識が用いられない場合

ここで断っておきたいのは、文章を構成する際に上記のような導入標識の使用は義務ではないということである。Stubbs (1983) も述べているように「談話の結束性を生み出すのは聞き手の解釈」(南出・内田訳: 118) であり単に文(発話)が並べられたただけでも、その前後関係に結束性を見いだすことは可能である。

表 3 に戻ってみると、データ L で何も導入標識を用いなかった場合は、2 例のみであった。これに対しデータ J で導入標識が見られなかった例は 27% (14 例) を占める。特にこの場合、大きく 2 つのパターンがある。1 つは、次の例 (7) のように近況を述べることによって、そこから〈理由〉を導き出し、そして〈本の返却遅滞〉に言及する場合である。もう 1 つは例 (8) のように、いきなり〈本の返却遅滞〉に言及した後、詫びの表現を続ける場合である。

(7) 卒業してからもう半年がたちました。慣れない社会人生活は何かと忙しく、先生にお借りした本も返せないままにいることには、お詫びのしようもありません。

(8) 先日から長い間本をお借りしたままになって申し訳ございません。しばらく体調を崩しておりまして、お返しできませんでした。

即ち、日本語母語話者の場合、接続詞などの導入標識を用いずとも、文章の構成、あるいは情報の展開構造に特定のパターン性を持たせることによって、結束性が保たれていたと考えられる。

4. 書き手の状況理解と手紙文

次に書き手が与えられた状況をどのように理解しており、それが書かれた手紙文の展開構造とどのように関わっているのか見てみたい。

先にコア情報の提示順序から情報の展開構造を分析した。両データで最頻用パターンとして〈本の返却遅滞〉先導型が、更にデータ J ではそれに次いで〈上京〉先導型が多く観察された。実は、このどちらから導入するかによって手紙文の特性が大きく変わってくる。それを示したのが図 1 である。

先述の通り、手紙文で触れなければならないコア情報を課題で示された順序通りに追っていくと〈本の返却遅滞〉への言及から始めることになる。本の返却が遅れているというのは言うまでもなく望ましくない現状であり、そしてその状態の原因は手紙の書き手にあるため、このパター

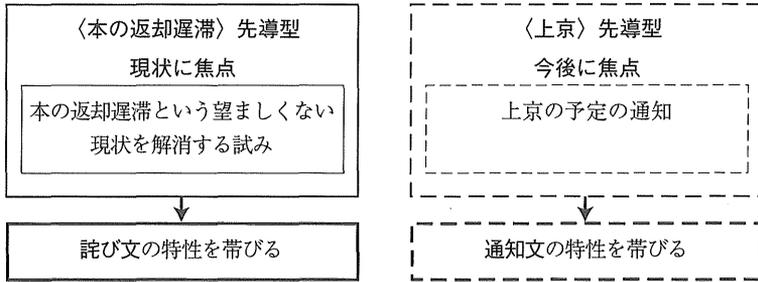


図1 展開構造パターンから派生する手紙文の特性の違い

ンでは自然とお詫び文を書く方向へ導かれていく。また、データ J では〈上京〉への言及から始めた手紙文も見られた。この場合は、上京予定を連絡するという通知文の特性を帯びてくる。

ところで、当課題の状況を社会言語学的に分析すれば、そこに人間関係の不均衡 (Leech (1983) 参照) があることが分かる。つまり、長い間先生から本を借りたまま、迷惑をかけているという状況があり、その解消が求められているという訳である。当課題では詫びろという指示はなかったが、このような状況の認識が書き手にあれば自然と謝罪し相手が当該状況を受け入れ納得してくれる方策をとることになるだろう。但し、謝罪が唯一の解決方法ではない。熊取谷 (1988) も述べているように、感謝表現を用いて相手に恩を受けていることの認識を表明し不均衡の存在を明示するという感謝行動によっても解消は可能である。

以上のことから、詫び表現、若しくは感謝表現の有無は手紙の書き手の認識を推測する手がかりと言えよう。データ L, J で現れた詫び表現、感謝表現の割合を調べた結果、図 2 のようになった。

データ L, J ともに 8 割近くが詫び表現を用いている。これによりこの度のデータ提供者の殆

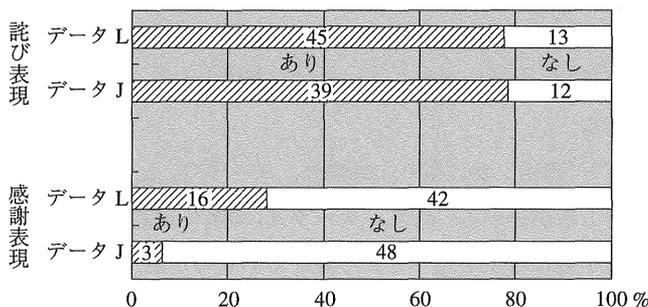


図2 全データにおける詫び表現と感謝表現の出現割合

どが人間関係の不均衡を認識しその解消を試みたと考えられる。

他方、感謝表現の使用に関して両データに違いが現れている。データ L の約 3 割が感謝表現を用いているのに対してデータ J では 6% に過ぎない。データ L での感謝表現は、全 16 例とも本文冒頭で「本を貸していただきありがとうございます」のように使われている。この 16 例のうち、9 例では後に詫び表現も用いられているので、これらは単純に感謝の手紙とは言えない。しかし本文冒頭文に感謝表現があるとその手紙文全体が感謝の手紙文の色彩を帯びてくることは避けられないだろう。上で人間関係の不均衡は感謝表現でも解消可能と述べたが、一般に詫び行動の方が感謝行動よりも丁寧と受け取られる傾向がある。また熊取谷 (1988) によると詫び及び感謝表現が同時に用いられる場合は、詫び表現の先行が普通であるという。その意味でも感謝表現を用いた 3 割のデータ L はデータ J との異質性が表面化していると言えよう。

5. 理由の提示

最後に、この度唯一自分で内容を考えて書かなければならなかったコア情報〈理由〉を取り上げて見てみたい。

人間関係で不均衡が生じた際、その理由を適切に述べることも不均衡解消に向けての重要な方策である。例えば Goffman (1971) は、理由を述べること (= accounts) を修正作業 (= remedial work) の中の一方策として挙げている。その意味でもこの〈理由〉は当課題を果たすにおいて重要な役割を負っていると言えよう。

当課題の下では先に述べたように〈理由〉は自由作文をしなければならない、どんな内容で、どのように表現化して構成するかという点において、他のコア情報と違い書き手の裁量が求められていた。それ故そこには書き手が与えられた状況をいかに理解していたかがより明確に反映され得る。以下、理由がどのように提示されたのか見てみたい。

5-1. 理由と詫びの提示順序

手紙文に限らず、日常生活で詫びなければならない場面では、理由と詫びが対になって用いられることが多い。今回のデータではこれら 2 つの提示順序はどうなっていたのだろうか。それをまとめたのが表 4 である。

表 4 を見ると「詫び・〈理由〉共にあり」の場合、データ L とデータ J では、その提示順序の傾向が全く逆であることが分かる。即ち、データ L の多くは詫びた後に理由が述べられるのに対し、データ J の過半数は理由を述べてから詫びているのが見てとれる。先にデータ L, J とともに 8 割が詫び表現を使ったことを見たが、その使用状況は異なることが分かる。提示順序は文脈を構成するにあたり重要な要素となるため、少なくとも両データから受ける印象が変わってく

表 4 詫び表現と〈理由〉の共起状態

	詫び・〈理由〉共にあり		詫びあり & 〈理由〉なし	詫びなし & 〈理由〉あり	詫び・〈理由〉共になし	合計
	詫び先行	理由先行				
データ L	30	13	3	12	0	58
データ J	11	23	5	4	8	51

ることは否めまい。このような相違が生じた原因としては西村 (1998) が言及している通り、データ提供者の母語である英語からの影響が考えられる。即ち、英語では〈本の返却遅滞〉の言及の仕方が例 (9) のように「詫び → 未返却 → その理由」となる傾向があり、その順序が日本語に転移された可能性がある⁸。

(9) I am sorry that I have yet return it to you. The reason being I just plain forgot that I had it.

5-2. 理由の構成

最後に、理由の内容を分析した結果が表 5 である。

表 5 〈理由〉の内容

内容	使用中	忙しい	忘れた	病気	紛失	機会なし	その他	なし	合計
データ L	18 (6)	15 (9)	9 (2)	6 (1)	5 (3)	0 —	3 —	2 —	58
データ J	7 (3)	19 (17)	3 (2)	3 (1)	0 —	7 (3)	0 —	12 —	51

() の数字は、その項目自体の理由を追加言及している場合を示す。ex. 忙しい + 忙しい理由。

ここでは各々の内容の是非は問わないこととして⁹、〈理由〉がどのように構成されているか、特に本の未返却の理由がどこまで詳細に述べられているかに焦点を当てて見てみたい。各データで最も多かった理由、即ち「使用中」と「忙しい」の2つを見る。すると、表 5 の () 内に示した数から分かるように「使用中」でも「忙しい」でもデータ J の方がより詳しく理由を述べていることが分かる。

具体的には次のようなデータが得られた。

⁸ 先に述べたデータとは別に、英語母語話者による英語文データも同様の課題の下、15 名分が採集された。この傾向はそのうち 11 名で見られた。

⁹ 理由の内容が十分に丁寧か否かということもこの度の課題では重要な点である。この点に関しては西村 (1998) の分析を参照。

(10) データ L での「忙しい」の例

実は仕事を忙しくなります。

(11) データ J での「忙しい」の例

実は、先週から始まりました国際会議の役員を引き受けてしまい、先月も今月も多忙な毎日のため、なかなか読むことができませんでした。

先にも述べた通り、この〈理由〉はどの程度詳しく書くか全て書き手に任されており、より詳しく書くというのが妥当な書き方だと判断した日本語母語話者が多かったと推測できる。人間関係の不均衡解消手段としての機能を考えると、データ L はデータ J に比べ詳しさを点で不足しており、日本語という文脈の中では不十分な可能性があるだろう。

なお、このより詳しく理由を述べるという傾向は、実は〈上京〉に関してもデータ J では見られた。本の未返却の理由が書くように指示されていたのに対し、上京の理由についてはそのような指示はなかった。にも拘わらず、データ J では 49% (25 例) がその理由を書いていた。データ L ではわずか 3% (2 例) である。またデータ J での例を更に詳しく見ると、25 例のうち 9 例は「所用で」「私用で」という言及に止まっているが、後の 16 例では「友人の結婚式で」「就職活動のため」というように実に具体的に述べている。これらの書き手は上京の予定に言及する際、より具体的に状況を説明し、それを理由として言及する必要があると判断したと考えられる。

以上のことより、日本語母語話者は相手に自分の状況を説明する際、より詳しく話す傾向にあることが見てとれる。もしこれが単なる傾向に留まらず日本語において期待される言語行動ならば、データ L でなされた本の返却遅滞の理由や、上京予定についての説明は不十分であるということになる。

ここで、これまでの分析結果を元にデータ L, J での理由及び詫び表現の構成方法の典型を作例すると以下のようなだろう¹⁰。

(12) データ L における典型例

- 先月先生から本を借りましたが、
- まだお返ししていません。
- 申し訳ありません。
- ずっと忙しかったからです。

(13) データ J における典型例

- お借りした本のことですが、
- レポートなどで忙しいためなかなか読めず、お借りしたままになっています。
- 申し訳ありません。

¹⁰ 一般に、日本語では状況の説明や理由を述べてから最後に結論を言う傾向があり、最初に結論を求める英語との違いがよく指摘される。本研究の結果も、この傾向に沿っていると思われる。

6. ま と め

以上、本研究では手紙文の展開構造に着目して、中級日本語学習者と日本語母語話者との異なり、及び学習者の手紙文が持つ不自然さの分析を試みてきた。まとめると次のようになる。

- ① 情報の展開構造に関して、日本語母語話者のデータにはバリエーションが多く観察されたが、学習者のものには見られなかった。
- ② 接続詞、前置きの使用、改段落といった結束性を示す方法を学習者はあまり使わない。
- ③ 学習者の状況理解には、日本語母語話者のそれとは相違が見られることもあり、特に詫び表現に関して、その用い方、理由との提示順序に異なりがあった。また理由の内容言述にも学習者の状況理解の不十分さが現れていた。

今回のデータの分析から、学習者は与えられた状況を翻訳することに終始し、状況を解釈してそれを文章に反映させながら、かつ適切に構成するまでには至っていないことが見てとれた。それは、構文力の不足のみならず、日本語の手紙を書くために、適切に状況を説明したり詫びたりするといった言語行動に必要な背景知識が不足していることにも起因すると思われる。この点を鑑みた指導が今後は望まれる。

付 記

本稿は第12回国際応用言語学会世界大会(1999年8月、於：早稲田大学)での発表原稿を元に全面的に加筆・修正したものである。

参 考 文 献

- 柏崎雅世(1997)「文体変化に伴う丁寧さを示すための勧め表現の交替——手紙文の場合」『東京外国語大学日本語教育センター論集』23号, pp. 1-15.
- 熊取谷哲夫(1988)「発話行為理論と談話行動から見た日本語の『詫び』と『感謝』」『広島大学教育学部紀要』第2部第37号, pp. 223-234.
- 佐藤喜代治(1990)「候文の性格」『日本語学』第9巻第8号, pp. 12-19.
- 塩澤和子(1989)「手紙の文体」『講座日本語と日本語教育』第5巻, pp. 187-211, 明治書院.
- 杉戸清樹(1994)「お礼に何を申しましょう?——お礼の言語行動についての定型表現」『日本語学』第13巻第8号, pp. 55-62.
- 橘 豊(1999)『手紙文の国語学的研究』風間書房.
- 中島国太郎(1990)「生活の中の手紙と国語教室における手紙学習」『日本語学』第9巻第8号, pp. 52-59.
- 西村史子(1998)「中級日本語学習者が書く詫びの手紙における誤用分析——文の適切性の観点から」『日本語教育』99号, pp. 72-83.
- 村上 恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』第62号, pp. 101-111.
- 森山卓郎(1995)「『丁寧な依頼』のストラテジーと運用能力——依頼の手紙の書き方を例に」『日本語学』第14巻第11号, pp. 94-101.

- Goffman, Erving. 1971. *Relations in public*. London: Allen Lane, The Penguin Press.
- Kumatoridani, Tetsuo. 1999. Alternation and co-occurrence in Japanese thanks. *Journal of Pragmatics*, 31 (5): 623–642.
- Leech, Geoffrey N. 1983. *Principle of pragmatics*. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』, 紀伊国屋書店.)
- Nishimura, Fumiko and Megumi M. Kashima. 1999. How is discourse developed in a Japanese letter?: A comparison of letters of apology by Japanese native writers and by students of Japanese. Presented to 12th World Congress of Applied Linguistics, 1–6 August, p. 115.
- Stubbs, Michael. 1983. *Discourse analysis*. Chicago: University of Chicago Press. (南出康世・内田聖二訳 (1989) 『マイケル・スタップス談話分析』, 研究社.)